

絵本の世界で表現された心の発達課題と克服

—「自分らしくあること」とは—

宮本 桃英

The Issues in the Development of the Mind and the Way of Solving the Issues Represented in the Picture Book “Being True to Oneself”

Momoe MIYAMOTO

はじめに

絵本とは、絵と言葉によってさまざまな世界が表現された作品である。絵本は、読み手と聴き手、つまり人と人との繋ぐ媒介となって、一人ひとりの心の中で生き続けることが可能である。絵本を素材とした研究は、児童文学や児童文化、保育学、教育学、心理学など多くの分野から行われている。そこでは大きく考えて、「絵本」そのものについて検討する視点、もしくは絵本と人の関係性、つまり「絵本」を媒介とした人と人とのかかわり、心の交流を検討する視点がある。この点に関して松居(2003)は「絵本とは何かを考えると、まずは本としての絵本そのものに焦点をしばって考察することができ(中略)もう一つの見方は絵本と人(読者)との関係です。読み手の大人と、聴き手の子どもの双方にとって、絵本がどういう働きかけをし、どういう意味をもつのかの問題で、これは今、特に大切な観点です」と述べている¹⁾。

絵本の中に表現されたテーマの読みとり方や感じ方は、一人ひとりの心に委ねられており、心が揺らぎ心打たれる内容もさまざまである。それを踏まえたうえで、本稿では、深層心理学におけるおとぎ話の研究方法を応用し、絵本の中から、現代を生きる私たちの生き方と如何に重ね合わせ考えることができるか、自分の心にとって重要な何かに気づきをもたらす体験につながる可能性があるかについて検討を試みる。

「自分らしくあること」は、心理学では「自我」、あるいは「自我同一性(アイデンティティ)の獲得」という概念との関連が考えられる。アイデンティティを獲得することは、人間が生涯をかけて変化しながら成長する上で重要な心の発達課題といえる。本稿では、臨床心理学の分野にあるおとぎ話の研究方法を応用し、絵本の内容そのものに焦点をあて、分析・考察する。本稿の目的は、絵本の中に表現された世界を素材に自我同一性を築く過程の中で、傷ついた自己の心を修復する視点、および心の発達課題を乗り越える経験を通して自分の生き方(自分らしくあること)を見出す視点について考察することにある。

1. 絵本と臨床心理学

(1) おとぎ話と深層心理学

おとぎ話とは、人々の歴史の中で語り継がれてきた物語である。その名称にはドイツ語の「メルヘン(marchen)」、英語の「フェアリーテール(fairy tale)」、日本語の「昔話」などがあるが、ほぼ同様の意味とされる。人間の生活の中から生じ伝承されるというおとぎ話の性質は、さまざまな研究分野の素材となった。おとぎ話の研究は、民俗学、民族学、文芸学、心理学などの

立場から多面的に行われている。この点に関してLuthi,M (1967=1974)は「民俗学は昔話を文化史的・精神的ドキュメントとして研究し、社会におけるその役割を観察する。心理学はその物語を心的経過の表出と考え、聞き手あるいは読者への影響をたずねる。文芸学は昔話をして昔話たらしめるものを確認しようとする」と述べている²⁾。おとぎ話は様々な立場や文化から長い歴史を経て研究され続けており、互いの研究が影響を与え補い合っているとと言える。

おとぎ話の心理学的研究には大きく二つの視点があるとされる(千野、2009)³⁾。ひとつめの視点は、おとぎ話に心の出来事が映し出されているとして、深層心理学の知見を活用して言葉を解釈・分析する方法である。登場人物たちが、どのような人物なのか、どのような感情や気持ちなのかを想像・推測・解釈するものである。ふたつめの視点は、語り手と聞き手におとぎ話が与える心理的影響や、聞き手・読み手がおとぎ話のストーリーをどのように受け取っているのか、子どもたちに与える影響を発達的に理解しようとする方法である。あるいは、語り手と聞き手(聴き手)の関係性の変化や展開に注目することもできる。

さて、臨床心理学とは心に何らかの問題や課題を抱えた人に対して心理学を応用し、心理学的援助を行う実践的な分野である。臨床心理学では、クライアント(来談者)とセラピスト(心理士)という生きた人間同士が出会い、互いに影響を与え合いながら成長してゆくことが重要だと考えられている。臨床心理学にもさまざまな理論的・実践的立場があり、そのうちのひとつに深層心理学というものがある。深層心理とは無意識の心の働きであり、自分では意識されていない内的な世界を仮定し、人間の心や行動の意味の理解を試みようとする研究分野である。その中で「おとぎ話」を素材とし、人間の心の在り方や生きるためのヒントを得ようとする領域がある。深層心理学的な視点からのおとぎ話の研究には、S.Freudが創始者である精神分析学やC.G.Jungが確立した分析心理学などを理論的背景としたものがある⁴⁾。v.Franz (1975=1979)は、「おとぎ話は普遍的無意識的(註1)な心的過程の最も純粋で簡明な表現であり」、「元型的イメージ(註2)は、普遍的な心に生じている過程を理解する最善の手がかりを提供する」と述べている。人間の心に普遍的に存在するテーマ、人間の心の基本的なパターンが表れているがゆえに、時代を超えて多くの人の心をとらえると考えられる。つまり、主観的な納得を他の人々と共有できるという意味での普遍性をもっている。河合(1977)が論及⁵⁾するように、おとぎ話の伝播の可能性を十分に認めるにせよ、一般的に普遍性との繋がりが深い心の様相は、時代や文化の差を超えて生き延び人類に共通するテーマや内容をもち得ることを意味している。ほぼ同時代に世界各地において類似のテーマやイメージを含んだ物語が生じているのも事実である。

さらに、河合(1977)が、昔話は人間の内的な成熟過程のある段階を描き出すことができると指摘⁵⁾するように、おとぎ話には、人生の節目や発達課題などが如実に表現されていると考えられている。発達課題とは、例えば「子どもが大人へ」、あるいは「少年が青年へ、そして男性へ」、「少女が乙女へ、そして女性へ」と成長するなどを例としてあげることができる。例えば『ヘンゼルとグレーテル』では、子どもたちが知恵を働かせて困難に打ち勝ち、自分たちの存在価値を見出す。『ラプンツェル』では、ラプンツェルが理不尽な状況を生き残る経験を通して、真の女性として自立し本当の意味での結婚を果たすなど、多くの物語が深層心理学の視点から分析考察されてきた。河合(1977)が昔話の内容と現代人の心性は強く結びついていると論及⁵⁾し、あるいは小澤(2005)が「子どもたちや私たち大人を取り巻く状況が厳しい時代であればあるほど、心を豊かに耕してくれる絵本や昔話のもつ意味は大きい、(中略)

そして私たち大人が、昔話や絵本から学ぶことで現代の私たちが抱えるさまざまな問題を解決する糸口を掴むことができる」と述べる⁶⁾ように、時代や文化の差を超えて生き延び、人々に語り継がれてきたおとぎ話は、限られた時代にのみ存在するのではないと考えられる。さらに、おとぎ話を取り扱うテーマは現代を生きる私たちの生き方といかに重ね合わせて考えることができるかを教えてくれる。それは自分（読み手）の心にとって、重要な何かに気づきをもたらす体験につながることもある。

註

- (1) 普遍的無意識 (collective unconscious) —C.G.Jungは、無意識が個人的無意識と普遍的無意識というふたつの領域から成ることを提唱した。個人的無意識は個人的な要素が濃く、それより深い領域に位置する普遍的無意識には、人類に共通の普遍性が存在すると仮定した。
- (2) 元型 (archetype) —C.G.Jungは、人類に共通した基本的な型、共通するイメージを元型とし、普遍的無意識は元型で満たされていると仮定した。またv.Franzは、元型的イメージが、物語の筋と結びついた全体のモチーフの中に含まれているとした。

(2) 絵本分析の試み—深層心理学の視点から—

心理学における絵本についての研究は、発達心理学や教育心理学、臨床心理学、社会心理学など幅広いアプローチから登場人物の姿を理解し探求されている。つまりさまざまな心理学的視点から絵本の内容について読み解くことができる。

先に、深層心理学の分野において、おとぎ話で表現されたテーマを素材に、人間の成長・発達とのテーマを重ね合わせながら分析・考察され、心理療法の実践のなかに活かすことが行われると述べたが、これは絵本を素材としたときも類似する場面が生じうる。物語作品を深層心理学的に研究するにあたり、時代や文化、民族性、個人（作者）背景の影響を受けない物語を分析の対象とすべきであると先に述べた。とはいえ、絵本には作り手個人の人生観や生きた時代的・社会的背景が表現されている場合も多く、絵本に普遍的な主題が描かれているか否かは、議論の余地があろう。佐々木（2000）が「丹念に見ていくと作家や画家が子どもの発達を考える上で重要な主題を実にいていねいに拾い上げています。日常生活の印象的なエピソードを絵と言葉の語りによって浮き彫りにし、それを描いた作家や画家の民族・文化・歴史等の背景を内側に含んだまま、子どもの心や発達についての解釈や意味づけが行われているのです」と述べる⁷⁾ように、絵本を通して、人間にとって普遍的とも考えられる重要な心の成長や発達に関するテーマの表現を見出すこともできる。もちろん、絵本に見出される普遍性を、自然科学的な因果関係の枠組みで人間心理の普遍性と同等に考えることはできない。しかし、絵本作品とは「ひとりひとりの子どもの心を複雑で矛盾に満ちた様相のまま、具体的に語り、描く」⁷⁾（佐々木、2000）のであり、人間の心の中にある普遍的な問題や課題、テーマとその解決の契機や可能性を、象徴的に表したものだということができる。

では次に、さまざまある発達課題のうちアイデンティティの確立に纏わるテーマが表現されていると考えられる作品について、分析・考察を試みたい。

2. アイデンティティ（自我同一性）の獲得—心の発達の理論—

「自我」という用語は、心理学のそれぞれの立場によって異なる意味や役割をもっている。

フロイトは、人間の心の中には「無意識（意識することができない領域）」の世界が存在すると仮定し、さらに心を「エス（イド）」「自我（エゴ）」「超自我（スーパーエゴ）」の三つの構造に分けられると考えた。「エス」は人間の本能的な欲求であり、「自我」はその欲求と現実社会との調整を行い、「超自我」は良心や道徳心を司り、厳しく自己規制を行う。

フロイトの無意識の世界についての理解をさらに拡げ深めたユングは、人間の心を意識的な部分だけでなく、無意識を含む全体として捉えた。そして「自我」を意識の中心として考え、心全体の中心に「自己（セルフ）」という概念をおき、自我は全体としての心の中の一部である、意識できる部分の中心にあるものとした。

さらに、フロイトが提唱した人格構造論は、アメリカでは自我心理学として発展した。それまでの「自我」の役割は、エスや超自我と現実との葛藤を和らげ、調整役としたが、自我心理学では自我にはより積極的かつ自主的な働きがあり、自我は自律した存在であり、人格を形成すると考えた(牛島ほか、2000)⁸⁾。つまり「自我」とは、ひとりの人間の主体性とそのらしさ、その人の存在証明そのものである。さらに自我心理学からコフトは自己心理学を提唱し、人間の心をとらえる際に自己という概念を用い、自己は他者との関係において発達するとした。

さて、自我心理学を確立したエリクソンは「アイデンティティ、自我同一性の獲得」という概念を打ち出し、心理社会的発達段階を提唱した。彼は、各発達段階に存在する心理社会的（葛藤経験）危機を乗り越え、発達課題を達成する過程が重要であり、人間は生涯をかけて社会との相互作用を繰り返しながら変化、発達、成長し続けるとの理論を確立した。この理論では、人間の発達にとっては、人生どの時期も大切であり、他の時期には体験できないようなことを十分に体験することが必要であることが示されている。アイデンティティは「同一性」「自分であること」「自己の存在証明」「真の自分」「主体性」「自分固有の生き方や価値観」「自分の意識（self）の連続性（continuity）と不変性（sameness）」などと訳される。自分はほかの誰でもない自分だ、過去・現在・未来を通して、わたしはわたしのままでいいという感覚をもち、さまざまな自分を統一する心の働きである。また「自我」は、一人ひとりが主観的に、幼児期に他の人や外界のものと自分とを区別し、青年期には自分をかけ替えない特別の存在としてとらえるという自我や自己というあり方をもっている（矢野、落合、1991）⁹⁾。

3. 絵本から学ぶ心の発達課題とその克服

一 『ヴァイオリニスト』（ガブリエル・バンサン作、今江祥智、BL出版）¹⁰⁾ を事例に一

（1）アイデンティティ（自我同一性）獲得のプロセスという視点から

本作品は、地位や名声に重きを置く父親の価値観の押し付けから、ヴァイオリンを奏で続けることを通して本当の自分の生き方、自分らしくあることの意味に気づいていく青年のストーリーである（図1）。先に述べたように「アイデンティティの獲得」という発達課題が物語の中心的なテーマであろう。この作品に関して柳田（2006）は、「青年が父親に決別を言い渡し、少年にヴァイオリンを教えることを決意して、自分なりの人生を拓こうとするのだった。何という普遍的なテーマかと思う」と述べている¹¹⁾。

青年が葛藤の中から自分の人生を見出すというテーマは、作品の中で表現された言葉だけではなく、まずバンサンのデッサン力により、直感的に青年の苦悩が痛烈に伝わってくる。また青年の表情や姿勢だけではなく、他の登場人物のそれぞれの心境や生き様のような姿や表情も細やかに、かつ迫力をもって描かれている。父親からヴァイオリニストとして批判され認めてもらえない青年は、ひとり住まいのアパートでもがきながらも精一杯演奏するのだが、その音

楽に興味をもったひとりの少年が窓辺に現れ、青年に眼差しを向ける（図2, 3）。さらには、青年の弾く音色に心惹かれた町の人たちは窓の外に立ち止まって聴き入るようになる。青年の音色は大勢の人を魅了し、少年や町の人たちから「いい音色だね！これだよ、これぞ音楽さ。」「あれのひくヴァイオリン、なつかしい音色だな」とまで語らせる響きであった（図4, 5）。このようにして青年は、世間で言われるところの地位や名声とは関係ない音楽家としての価値観があることを知るのである。その価値観は人々の心に影響を与えるような響き、感動をもたらす響きである（図6）。そしてその感動をもたらしたのが、自分自身の音楽なのだということにも青年は気づくのである。

以上に述べたように、青年が自分にとってヴァイオリンを弾くことの意味を確信できた背景には彼自身の心の中の闘いだけでなく、彼の演奏を毎日のように聴きに来る少年や、町の人



図1



図2 画面1



図3 画面4



図4 画面28



図5 画面30



図6 画面37

たちの存在が重要である。つまり、周囲の人々とのかかわり合いがあったからこそ、青年は苦しい心の闘いを生き抜くことができたのである。青年はさまざまな他者とかかわり、すなわち社会的存在として自我を確立していったのである。青年は父親との心の闘いの中で、混乱にも近い葛藤をしている (図7)。そして青年は、その苦悩の経験から自分の存在意味を見出した。父親は青年を苦しめ傷つけたのだが、一見マイナスとも見受けられる者の存在は、青年の心をたくましく育て成長させたのである (図8)。マイナスとも解釈できる父親の存在、同時にプラスの存在と理解できる少年をはじめとする聴衆の存在は、青年にとって共に重要である。



図7 画面21



図8 画面39

父親から「みかけだおし」「しがない音楽家」と言い放たれ、その言葉は彼の存在そのものを否定しかねないものである。深く傷ついた青年にとってアイデンティティを獲得していくことは、傷ついた心を修復することでもあったのではないだろうか。自分はかけがえのない一人の人間である、つまり自分自身を大切に思える自尊感情を取り戻す体験と考えられる。健全な自己愛の取戻しでもある。そうして青年は、ついに父親へ決別の手紙を書くまでとなる。つまり、父親の呪縛から自由になり、少年にヴァイオリンを教えると言い、父親という存在から心理的に自律を果たした (図9)。そして、自分の道の新たな地点にたったのだ。最後の場面で少年は「いつからはじめるの?」と問い、青年は「いまからだよ」とこたえるのである (図10)。青年期に必要なアイデンティティを獲得したことを契機に、青年は生涯を通して自分が心から納得できる音、心の中にすんと落ちる音、必要とする音楽を求めていくのだろう。そのようにして青年はひとりの人間として成長し、さらに発達し続けていくと考えられる。



図9 画面49



図10 画面56

この作品では、子どもが少年（少女）が青年（乙女）になり、さらにはおとなになるために必ず出会わざるをえないであろう、向き合わざるをえないであろう心の発達課題とその克服が描かれている。自我は心の闇の部分や傷ついた部分をも統合していかなければならない。しかし、ヴァイオリニストでの青年のように、重要な他者から否定され認めてもらえない環境にあると不安定で自分に対する基本的信頼が確かではない。自分自身に対する信頼、周り（社会）に対する信頼が揺らいでいる自我にとっては、アイデンティティの同一性は、困難を伴う獲得のプロセスとなる。どのように折り合いをつけていくのが課題となる。

佐々木（2000）は「子どもたちに好まれ愛され続けている絵本のなかには、こどもたちの発達の質的転換—多くは周囲の人間関係との葛藤が引き起こすものですが—にまつわるエピソードが繰り返し描かれていることです。時代が異なり、文化が異なり、親子関係やそこに登場する主人公たちの性格が異なっても、繰り返し繰り返しある主題の物語は、（中略）世代を越えて繰り返し読まれます」と述べて⁷⁾いる。この論及からは、絵本の中にはさまざまな発達段階にある人間の心の発達課題とその克服について描かれていることが理解できる。

疑問と真剣に向き合い、悩みを乗り越え、自ら答えを見出していくことでわたしたちの心には強固な自我が築かれるのであろう。自分らしさを求めて解決することも、人間性の発達のなかで重要な課題である。感覚的なものだけでなく、社会の中での役割、職業、身分など現実的な「…としての自分」と一致させて、自信をもつことでもある。アイデンティティの獲得は、青年期に突如現れるものではなく、それまでの発達段階で獲得されてきた課題や危機を振り返り、見直すことにもつながる。発達の課題を十分に達成し、危機を乗り越えてくれば、自分の存在を確信しやすくなるだろう。この自己選択のプロセスを通して、自己価値を高めるような同一性を自分のものにし得るかどうか、その人物がいちばんそのひとらしい人生を送ることができるかどうかのわかれ目が生じる。この点において、ヴァイオリニストは自分の人生の新たな節目を経験し、生きる道を見出すことができた。単なる課題の記述でなく、また課題を解決できるか否かという単純な形ではなく、解決のされ方を問題とすることである。この主題は青年期だけではなく、生涯にわたるテーマである。

（2）イメージの世界としての読み方—登場人物はすべて主人公の心の声という視点から—

これまで、物語の登場人物を一人ひとり独立する存在として捉え、テーマを解釈してきた。ここからは違った読み方から『ヴァイオリニスト』のテーマを検討していく。

おとぎ話にアプローチする方法、すなわち解釈や理解の仕方のひとつの方法として物語を一人の人間の心の中に起こったドラマ（心の発達課題の克服のプロセス）として解釈する方法をもちいることがある。つまり、物語の中に現れる登場人物の一人ひとりを、一人の人間の人格のある要素が示されたもの、一人の人間の心のさまざまな側面としてとらえる考え方である。その点について、山口（2006）は「物語の主人公は、通常その人格の意識的態度を表象するもの、言い換えれば自我を代表するものとする。そして脇役的人物は、主人公である自我には意識されていないけれども、その人の中に存在する、別の性格特性を表すとみなすのである」と述べている¹²⁾。それは物語に登場する者やその状況はひとりの心の奥底のイメージの世界だと捉える。つまり、この2点における読み方の違いは、心理的なテーマ（心の発達課題）を理解するうえで、物語を「現実の世界で起こっている出来事」として解釈する読み方と、「ひとりの人の心の中のイメージの世界・無意識の世界（意識できない、言語化できない世界）で起こっている出来事、ひとりの人の多様性を示すさまざまな性格特性」として解釈する読み方と

ある。つまり「自分の奥深いイメージの世界に降りていき自己を探求し、自分を見出していく」という読み方とでも言えようか。

このような物語の読み方として『セロひきのゴージュ』を分析考察したものがある(宮本、2011)¹³⁾。ゴージュがさまざまな動物たちとの音楽による交流を経て(象徴的には彼が自分自身の心の声とやりとりを交わす)、彼自身から湧き出る素晴らしい音楽に出会い、聴衆の感動を呼ぶというストーリーである。v.Franz (1974)は「昔話で動物が登場するとき、それは動物そのものではなく、その動物で表される意識に隠された一つの人間的特性を表している」と述べている⁴⁾。

このような心理的なテーマ(心の発達課題)を解釈するアプローチ方法を前提にすると、『ヴァイオリニスト』に登場する人物たちは、彼の心の中に生きている存在、言い換えれば青年の人格の一要素を示すものと仮定することになる。また、このイメージの世界は、夢を引き合いに出して考えることができる。眠っているときは、意識の枠がはずれて、心は自由にただよっている状態になり、夢のなかでは、起きているあいだの自分には体験できないような世界、今のこの自分とはちがった「もうひとりの自分」を生きていることができる(岸、1991)。夢や、心の奥底の世界(無意識)について知ることは、自分らしさについて考えるときの手がかりを与えてくれる。

深層心理学の視点から作品を分析し考察するという作業は、言葉が表す意味だけではなく、言葉そのものの意味からイメージを拡げ解釈していくことになる。父の厳格な言葉、少年の不安げでかつあたたかな眼差しや、青年に問いかける言葉は、彼らが発した言葉として捉えるのではなく、すべて青年という人の無意識とも呼べる心の世界であり、彼の性格特性のうちの一要素、一部を表すもの、彼自身の心の声を現す担い手たちだと解釈してゆくのである。それは、青年の心の奥底に秘められた感情、意識されていないような感情の世界といえる。また「心(こころ)」という言葉の意味における定義はさまざまである。ここでは、その人が気がつくこと・意識的な意志というような心の働きと、気がつかない・またその気がつかないうちに心が働くこと、意識には立ち現れない内容のものなど多義的な意味合いで論じていく。「心」は人間の思考や行動といったものだけではなく、背景のようなものも含む。つまり人間の「全体性」にかかわることなのである。

『ヴァイオリニスト』の主人公である青年の生き方を「こうでなければならない」と強く責めたてる厳格な父親のイメージは、青年が表向き目指す人間像の象徴だったかもしれない。他者からの期待に過剰に適応しようとする青年の自己は真の自己とは乖離したものである。社会の中で生きるために、ある程度の社会向きの顔や適応は必要であるが、それが自分の気持ちとあまりにかけ離れてしまえば、心理的に大きな負担を強いることになる。そして偏ったものの見方や生き方となる。この囚われから自由になるために、小さな少年のイメージ(青年の性格特性の一側面)は重要である。「少年」のイメージが意味するものは、自分の心に向き合っていこう、自分の素直な感情に寄り添ってみようとする姿勢、青年の性格特性の一要素だと解釈できる。少年が青年の演奏を眺めに来たとき、青年の演奏に心惹かれて訪れたときから、青年の心の旅が始まろうとする。青年には必ず変容し発達する、成長を遂げる可能性があると考えられるのである。さらにいえば、青年のさまざまな性格の要素が統合されていく過程でもある。

バンサン絵からも読み取れるが、少年は青年のアパートの窓辺に現れ、青年の様子を不安そうに、心配そうに眺めている。もがき苦しみながら自身の音を生み出そうとしている青年をいつも見守っている存在である(図11)。少年のイメージが意味するところは、青年にとっ

て、いつも自分を見つめてくれている、理解してくれている、必要なときには助けの手を差し伸べてくれている、本当は傍に寄り添ってくれている存在であると考えられる。青年が自分に対して向けるあたたかなぬくもりのある眼差し、やさしさをイメージすることができる。そのやさしさを青年が自覚して素直に受け容れられたとき、青年は(少年に対して)「明日またくるよ、ね」と声を漏らすのである(図12)。少年のイメージは、自尊感情をもちなおすことであり、それは自分を信頼することでもある。さらにいえば健全な自己愛を育みなおすイメージでもあろう。自己愛とは「自分自身の個性を尊重し、自分自身を愛し、理解することは、他人を尊重し、愛し、理解することは、不可分の関係にあるのだ」(鈴木、1991)¹⁵⁾。自己愛は生涯存在し、それは未熟な自己愛から成熟した自己愛に成長するものである(牛島、2000)⁸⁾。

彼は自分の心の中における「少年」のイメージ、すなわち彼自身の性格特性の一側面と出会うことを通して、心の修復と自分らしさを見出していくのである。それは、彼が現実から自由となり、自分自身の心の世界(=内界)を体験することが表現されていると想像できる。イメージの世界の人物たちと出会うことは、自分の心の声を聞くこと、自分の心の声の聴き手になること、同時に、知らなかった(意識できなかった)自分の性格の一つの側面を知ることである。同時に、自分らしさを見出すことであり、自分にとっての問題や課題を乗り越えて発達していくことにもつながる。青年は、少年の存在(意識されていない性格特性)によって、自分自身の気持ちに向き合うことに抵抗することなく、あるがままを受け容れようとしている姿勢がうかがわれる。見ようとしなかった自分自身の心にやさしい眼差しで寄り添おうとしていると考えられる。結果、青年は少年にヴァイオリンを教える、街の人々の心に響く演奏を届ける「ヴァイオリニスト」という彼自身の生き方を見つけた。彼が「彼自身」になれたことは、父親という存在、縛られていた観念や価値観から自由になり、心理的な自律を果たしたのだと考えられる。このとき、青年の心に大きな変化が起こったと理解できる。これまで気づかなかった(あるいは受け容れられていなかった)青年の感情が今彼自身のもの(感情)になると考えられる。

以上の考察から、人間の「心」や「生き方」が変容を遂げるためには、焦ることはなくゆっくりと着実に進んでゆく生き方もあることがわかる。「自分自身の心」で納得できないままの急な成長や変化は心に大きな痛手を伴う。それよりも心身に起こるひとつひとつの変化を大切に噛み締めながら発達や成長を遂げることのほうが重要なのではないだろうか。自分が求める真の感情について、自身で本当は潜在的にはわかっていたことであるかもしれない。青年のアイデンティティは、彼のイメージの世界における登場人物たちとの交流(自分自身の心の声との交流、彼自身の特性のさまざまな要素を拾い上げる作業)によって、確固たるものとなった。



図11 画面20



図12 画面48

「現実」と「非現実」、「意識」と「無意識」、「外界」と「内界」といった対照的ともいえる世界を青年自身が行き来しながら成長していくと考えられる。青年の心の中で、あるいはイメージの世界においては、確かに起こっていた「心の現実」である。

先述したように、青年の中で忘れられていた音楽を取り戻した過程は、青年の心の奥深くに秘められた感情や真実の自己を表現したい気持ちに気づき、生命感溢れる感情が確かに自分自身から生じる感情だということを再発見する道のりであった。岸(1991)が「あまりにこころの状態が一方にかたよってしまったとき、それをおぎない、こころのバランスをとるために、無意識のうちに自分にとって必要なことをいろいろする」と述べることも重なるが¹⁴⁾、青年の心の奥に埋もれていた自分らしい生き方、偏った生き方として影となっていた部分が照らされたという意味につながっていく。登場人物たちは彼自身が心の中に追いやった、彼自身の姿だったのかもしれない、彼がこれまで置き去りにしてきた「心の真実」や「生き方」なのかもしれない。青年は、彼の心の中でばらばらになっていた心の要素を自分の中に引き戻し繋ぎなおすことによって、心のバランスを取り戻せたと考えられる。これまで青年は「窓」を通して少年と交流を続けていたが、彼が自らの心の真実に気づいたとき、直接二人が出会う場面が生じる(図13)。描かれた「窓」は、青年の真の姿、真の感情に通ずる媒介であったと考えられる。

人は現実の世界で一生懸命に生きようとする、ときとして自分らしさを忘れてしまうことがある。不自然な自分を生き続けたとき悩みや問題、あるいは症状として表れる場合もある。問題症状としてあらわれるとき、人は辛さや苦しさ、悲しさや絶望を体験している。これらの体験は大変辛いものではあるが、この辛さを辛さと感じ、何とか乗り越えようとする過程にこそ、人として成長する大きな糸口があるのではないか。その過程では、心の痛みを伴うが、同時に心が癒され満たされてゆく過程でもあると考察する。



図13 画面53

4. 結論—「自分らしくあること」とは—

『ヴァイオリニスト』の主題から考察した結果、自分らしく生きるということは、自分の真の感情と結びついた上で自分らしさを感じられるものであり、ときに大きな葛藤を生じさせ、それを乗り越えなくてはいけないという結論が見出された。心には自分がよくわかっている、自分の気持ちだと思い込んでいる意識と、自分では知ることができない、あるいは意識したくない無意識の部分がある。ただし、その無意識の世界には自分でも気づかないような潜在的な可能性に溢れた部分もある。これが本当の自己、自分らしさと言いつづけることができるのだと考えられる。ときに本当の自分を露にすることが危険を伴うこともあるが、それでもなお心の奥底に潜む深層心理からのメッセージを受け取り、新たな自分を見出していく勇気が必要なのだ考える。

自分の心の奥深くにしまっていたもの、さまざまなものに触れ合っていくと、今まで気づかなかった自分の姿を見つけることがある。岸(1991)が、『『自分らしい』『自分らしくなる』』というのは、なにか大きな、格好よい目標をみつめて、それになりきるのではなく、自分のこころのなかの可能性とさまざまな方法でつきあい、自分のこころの枠を静かに広げていくこ

とのように思える」と論及する¹⁴⁾ ように、自分らしいということは、自分の心の中にあるさまざまな自分の感情とどのようにつきあっていくかということでもある。さらに言えば、自分の心の現実とつき合うとは、心の奥底に入っていく、その声を聴くことによっていろいろな感情が自身の身体中を駆けめぐり、何かに気づかされるということではないだろうか。

絵本の中には、画家や作者の明確な意図やメッセージが含まれる作品があるのは事実である。また読み手の一人ひとりの感じ方や受け取り方は異なり、絵本とは読み手が自由に感じ、思いを馳せ、それぞれ自分の内面や経験、価値観を投影して読んでいる。読み手は絵本の中に自らの心の現実を映し出す。言葉からイメージした「理解」ではなく、感情が動かされる「体験」がそこに生じる。自分に気づきが生じ、変化が起こりうるのは、無意識が意識化されるからであろう。自分の心に寄り添うとは、自分の内面と向き合って、受け容れ、気づくことである。その結果、心が揺らぎ心打たれる内容もさまざまである。

それでもなお、本稿での絵本の深層心理的な視点による分析、検討の結果、多くの人の心の中に現れる心の問題や発達課題、人がそれをどのように乗り越え、克服し、自分らしさを見出していくのか、その過程で傷ついた自分の心を修復するのか、自分を取り戻すのかという普遍的な主題が絵本の中に描かれていると考察できた。

本来「絵本」とは絵と言葉を見、聞き、聴き、語ることで味わえるものである。その重要性は決して見失ってはならない。だが一方では、ひとつひとつの場面に表現された「絵」から受ける印象や、「言葉」を捉えていくという心の作業は、人が自分自身の「心」と寄り添っていく体験にも繋がる。本稿では『ヴァイオリニスト』に焦点をあてたが、今後、同様のテーマを取り扱った作品を幅広く取り上げ、さらなる検討をすすめたい。

引用文献

- 1) 松居直 (2003) 『絵本のよろこび』日本放送出版協会 P.4
- 2) M.Luthi (1967) ES WAR EINMAL…Von Wesen des Volksmärchens Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen, Germany (野村法訳 (1974) 『昔話の本質』福音館書店) P.233
- 3) 大野木裕明、千野美和子他 (2009) 『発達と臨床のアプローチ 昔話ケース・カンファレンス』ナカニシヤ出版 序文iii.P.99
- 4) M.L.-v.Franz (1975) :An Introduction of Fairy Tales S.11, Spring Publications (氏原寛訳1979 『おとぎ話の心理学』創元社) P.4 P.44
- 5) 河合隼雄 (1977) 『昔話の深層』福音館書店 P.26L.10, P.29, P.38
- 6) 小澤晴生 (2005) 『昔話・絵本の再発見』古今社 P.5
- 7) 佐々木宏子 (2000) 『絵本の心理学』新潮社 はじめにiii.P.2, 13
- 8) 牛島定信編 (2000) 『現代精神分析学』放送大学教育振興会 P.122 P.125
- 9) 矢野喜夫・落合正行共著 (1991) 『発達心理学への招待』サイエンス社 P.231
- 10) ガブリエル・バンサン作、今江祥智訳 (2001) 『ヴァイオリニスト』BL出版
- 11) 柳田邦男 (2006) 『大人が絵本に涙するとき』平凡社 P.19
- 12) 山口素子 (2009) 『山姥、山を降りる』新曜社 P.8
- 13) 宮本桃英 (2011) 「絵本から学ぶこころの成長」『光塩学園女子短期大学紀要 第11号』
- 14) 岸良範 (1991) 『思春期の心理学』ポプラ社 P.29 P.34 P.133 P.135
- 15) E.Fromm (1956) The Art of Loving (鈴木昌訳 1991 『愛するということ』紀伊國屋書店) P.94

